
イースター

シン

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

イースター

【Nコード】

N1928BA

【作者名】

シン

【あらすじ】

父、十六夜秀隆しゅうりゅうの謎の失踪により、わずか十九歳で日本屈指の大財閥、十六夜グループの総帥となった司つかさは、幼い日から彼の主治医として側にいるドクター・刃やいばと共に、十六夜秀隆失踪についての謎を探る。

だが、司が二十歳になるまでの後見人たる兄、柊はなの策謀により、司は、英国貴族、ウォリック伯爵の息子、クリストファーと政略結婚させられる。金の欲しい伯爵家と、社交界での身分の欲しい成り上がり財閥の縁組だ。

盲目のために、グループを継ぐことが出来なかった柊の狙いは……。

司はクリスとの結婚を撥ね付けるが、それも、柊の策謀を知っていることではなく、司自身が持つ秘密のためだった。

今から一六〇年前、有害宇宙線により発生した新種の癌が人々を襲い、染色体 XX から成り立つ女は絶滅し、司はこの世に存在している唯一の《女》であった。もちろん、一六〇年前、女が生存していた頃から性転換する男は珍しくはなく、今の世にも性転換して女の姿を持つ者は珍しくなかったが、性転換しても、彼らの染色体は XY であり、XX ではあり得ない。

司は一体、何者なのか、そして、司の側にいる男、ドクター・刃とは何者なのか。失踪した十六夜秀隆は何をしていたのか、柊の口から零れた《イースター》とは何を意味する言葉なのか。謎ばかりが増え続ける……。

E a s t e r ? - 1 (前書き)

男装の麗人に憧れます。

子供のころに見た『リボンの騎士』のサファイヤ王子(王女)や、
『ベルサイユのばら』のオスカル。

彼らの美しく、潔い姿は、とても印象的でした。

残酷表現や、性描写があります。苦手な方はご注意ください。

「ごらん、司しつか。この雄大で繊細な美しい地を。見渡す限りのグレーシャー・ブルー……。おまえには、世界中の美しいものを見せてやる。いつか、おまえがその名の通り、全てを司る者となる時のために……」

翠みどりとも、碧あおとも言えない神秘的な色合いを含む、氷河藍グレイシャー・ブルー。

解けることのない万年雪や氷は、人の知る色では決して表現できない透明感を持っている。信じられないスケールのグレーシャー・ブルーは、それを見つめる幼子の射干玉の瞳に、力強い父親の声と共に焼き付いた。

「夜には極光オーロラを見せてやろう。地球の両極の夜空を舞う光の帯だ。太陽の爆発によって起こる太陽風が、地球の磁場を通る時に放電し、大気層にぶつかって生じる現象だというのが、私は今でも暁の女神が夜に架ける虹であると信じている。おかしいか？」

はにかむような父の表情に、司は小さな手で、大きな手を握り返した。

暖かい眼差しが、返って来る。

「今、この地球上で最も神秘の名に相応しいのはおまえだ、司」

「……ぼく？」

「ああ。自然は人々に美しいものを見せてくれる。だが、時には人を嘲笑うかのように、恰あたかも神の如く、試練を与える。何故？」

人間の愚かさを見兼ねてのことなのか、それが神々の決まり事なのか……。一五〇年前、有害宇宙線により、DNAに障害を受けたおんなが絶滅してしまったように。毎日降り注ぐ紫外線や、毎夜降り注ぐ宇宙線が、人間の作り出した突然変異物質と結び付き、DNAに突然変異を起こさせ、新種の癌を発生させてしまったように。神々がその銀色の指先を翳す度に、この世の神秘が消えて行く……。私はその神秘を取り戻したいのだ、司。消えて行く

美しいものを、神々の手から取り返すことこそ、私が　十六夜が護^{まも}つて来た《イースター》だ。そして、おまえはそれを司る……。その存在自体が神秘である、おまえが……」

極北の地を飾るグレーシャー・ブルーは、人々に夢を見せる秘境であつた……。

木洩れ日の落ちる湖が、ある。

白い光が緑の葉を黄金色に染め変え、澄んだ湖面に、きらきら、とした模様を創る。

吹き抜ける風に、湖面が、揺らめく。

イングランド北西部のカンブリア地方　。

標高約九八〇メートルのスコーフエル山を取り巻く湖水地方は、十余の湖を持ち、山間には五〇〇以上の湖沼を持つ、という。

湖水の色も深く、自然の美しさを織り成すその湖岸に、白い精霊が微睡^{まどろ}んで、いた。　いや、白いは肢体だ。何も身につけていない裸体、であつた。木洩れ日に溶けるしなやかな肢体は、まだ華奢なそのラインを、より幻想的に、より清らかなものとして、映して、いる。

額にかかる煩わしげな黒髪も、濃い陰をとす長い睫毛も、神秘を司る神々の如く、艶やかな輝きに、満ちて、いる。

スラリと伸びる手足は眩しく、柔らかく膨らんだ乳房は初々しく……。

無防備に、そして、自然に溶け込んで眠るその姿は、ケルトの神話に出て来る精霊^{シイ}のようでもあつただらうか。

「司様！　どこですか、司様！」

微睡みの中、湖を取り囲む森の向こうから、樹木の合間を縫って、声が届いた。誰が聞いても、捜し回っている、としか思えない呼び

声である。そして、それは、普段は寡黙な男の呼び声であった。

「ん……」

司は白い肢体をけだるげにくねらせ、二、三度瞬いてから、瞳を開いた。

白い光が、眩しく、差し込む。

手を翳し、静かな夜の湖をはめ込んだような黒い瞳に、陰を、作る。

十六夜司。湖岸に裸体を預けるその精霊は、わずか十九歳という幼さでありながら、日本屈指の巨大コンツェルン、十六夜グループの総帥として立つ《少年》であった。

彼が持つ神秘的な美貌と、不思議な色香は、神々の寵愛によるものだっただろう。

「司様っ！」

樹木の合間を抜けて、湖を臨む森の切れ目に、一人の男が窘めるような言葉を放って、姿を見せた。三七、八歳だろうか。伶俐な面貌に相應しい、鷹のような瞳をしている。その長身も、鍛え抜かれた体躯も、どこか得体の知れない影を秘め、ただ者ではない雰囲気を作り出している。

彼は、ドクター・刃シ、とだけ呼ばれていた。司の主治医として、十年近い歳月を、片時も離れず過ごしている。

「司様！ またそんな格好で　っ」

裸で湖岸に寝そべる司を見つけ、咎めるように声を粗げる。それから、周りに散らばる司の服を広い集め、露な肌を覆い隠す。

「こんな森の奥まで、誰も入って来やしないさ。　何か用か、ドク？」

シャツの袖に腕を通しながら、堪えてもいない様子で、司は言った。

「お兄様がお見えです」

刃シは言った。

「柎ひつぎが？　へエ。あの人がぼくに逢いに来るなんて珍しい。しかも、英国のこんな田舎まで」

「随分、お怒りのご様子でしたが」

「……。ウォリック伯のパーティに行かなかった理由なら、もう話したさ」

「承知しています……」

少し瞳を細め、それでも淡々とした口調で、刃シは言った。司の手に、胸の膨らみを隠すための伸縮性のあるコルセットを渡し、服についた草を払う。

初夏　。

新緑に覆われ、花々が開花するこの季節は、イギリスのカントリー・サイドが最も美しく輝く時期だ。

湖を渡る風も、心地良い。

「……お父さまの夢を見ていた」

ボトムとシャツを整え、湖を後にして、司は言った。森の樹木が零したような眩きでも、あった。

「十六夜翁おふの？」

「ああ。アラスカへ連れて行ってもらった時の夢だ。一面のグレイシャー・ブルーと、夜に架かるオーロラの……」

ザワ、つと風が、樹木を鳴らした。

刃レンは、何も言わず、ただ暖かく瞳を細めて、隣を歩いていた。

「お父さまが何をしようとなさっていたのか……解るか、ドク？」

小さな顎を持ち上げ、司は訊いた。

「いえ……。私はただ、あなたをお護りするよう、言い付かっているだけです」

「そう……」

二人は、それから無言で、森の向こうへと足を進めた。

司の父、十六夜秀隆ひでたかが突然、姿を消してから、一年。一向に消息が判らないことも含めて、十六夜の親族やグループのお偉方は、やれ親族会議だ、やれ緊急会議だ、と騒ぎ立て、結局、十九歳の司が十六夜グループの総帥として立つことになり、兄の柎は、司が二十歳になるまで、その後見人として立つことが決まった。誰もが、十六夜秀隆の行方を捜すことを半ば諦め、十六夜のグループと財産を守ることを優先したのだ。

森を抜けると、パア、と突然、視界が開け、目の前に、見事な庭の中に佇む、優雅な城が現れた。

莊園屋敷マナーハウスの性格を深く留めるその城は、自然の風景をそのまま取

り入れることに重点を置き、古き良き時代の面影を偲ばせるように、静かな佇まいで、そこに、あつた。

陽光の降り注ぐ庭を抜け、二人は、その城へと身を沈めた。

「早く部屋へ戻られて着替えを」

司のラフなスタイル　しかも、草や泥の付いたその格好を見下ろし、刃シが言いかけた時であつた。

「その時間を待つ気もなさそうだ」

ホールの正面の階段を見上げ、司が言った。

絨毯を敷き詰める階段の上には、車椅子に腰掛ける三十代半ばの男が、いた。濃い色のサングラスを掛け、一目で高級と知れるスーツを身につけている。薄い唇は、その手に持つ鞭と共に、彼の冷酷さを表すものでもあつただろうか。

両端には、ボディ・ガードらしき屈強な男が二人、ダーク・スーツに身を包んで立っている。

「相変わらず、変声期も迎えていない少年のような声だな」

車椅子に掛ける男が、言った。

司は何も言わずに、無言で男を見据え返した。睨みつけるような視線ではなく、もう慣れた厭味を聞くような視線である。

「わざわざ着替えに行く必要はない。どうせ、目の見えない私との話だ」

鼻を鳴らしてのその言葉は、多分、自嘲ではなかっただろう。

目が見えない、という言葉の通り、サングラスを掛ける彼の瞳は、ただ正面を見つめるままで、動かない。司の視線と合うことも、なかった。

彼は、司の兄で、十六夜柊、と言った。

「お久しぶりです、お兄さま。ぼくが上に上がりましょうか？ それとも、あなたが下に？」

広幅の長い階段を挟み、司は、車椅子に腰掛ける男 柊へと、

皮肉な視線を持ち上げた。

柊の表情が、きつく、変わった。

「妾の子の分際で、大層な口を利くものだ。 まあ、父にしても、息子が目の見えない私一人では、後継者に不安を感じていただろうからな」

「……………」

「早く上がって来い。おまえの後見人として話がある」

柊が言うと、ボディ・ガードたちが車椅子を押し、奥の部屋へと翻った。

十六夜秀隆の長子であり、司の兄である柊は、目が不自由なこともあって、グループの総帥として立つことはなかったが、取締役の一人として、そして、司の後見人として、グループの要所を押さえている。もちろん、目は見えなくともグループを率いる 支配す

る能力は充分に持ち、また、持っているだけに、司の存在は邪魔でしかなかっただろう。十五歳も年の離れた、まだほんの子供でしかない弟が、グループのトップに立ったのだ。

だが、司もまた、グループを率いる才覚を持った、十六夜秀隆の息子、であった。

「司様……」

刃^{レン}が心配そうな視線を、向ける。

「パーティに行かなかった、というだけで、あれか」

肩を竦め、司は、刃^{レン}の心配を脇に置いて、階段を上がった。

刃^{レン}も後に続いて、足を進める。

マホガニー材の見事な細工の手摺りに沿って向かった部屋は、この城の中でも特に豪華な客室^{ゲストルーム}であった。奥にベッド・ルームを設け、バスもトイレも、全て一室に備えてある。この部屋だけで、日本の中層階級の家族四人が、充分に暮らせるスペースがあっただろう。

柊は、手前の部屋で、ティー・テーブルに落ち着き、紅茶のカップを持ち上げていた。目が見えないにも拘わらず、カップは寸分違わず、ソーサーに乗る。

カチャ、と食器の触れ合う音が、した。

「お話しは何でした、お兄さま？　ああ、ぼくにもお茶を」

ティー・テーブルを囲む椅子の一つに腰を降ろし、司は、傍らに立つ柊の部下に声をかけた。

部下は、文句も言わずにお茶を注ぐ。それを口に含むと、柊がカップを置いて、口を開いた。

「貧血で倒れて、ロード・ウォリックのパーティに行けなかった、だと？　どういうことだ、司？」

抑揚のない、それでも静かとは言えない口調、であった。

「柊様、それは先日もご連絡いたしました通り、司様は忙しい日が続いて体調を」

「君には訊いていない、ドクター・刃^{レン}。たかが家庭医^{ホームドクター}の分際で、グ

ループのことに口を挟むな」

「……」

柊の言葉に、刃は黙って指を結んだ。

「医者が側についていながら、司の健康管理も満足に出来ないとは。君をどこかから拾って来た父の判断が誤っていた、としか思えん」

「お話しは何でした、お兄さま？」

刃に対して続く厭味に、司は鋭い視線で問いかけた。もちろん、柊には、凍りつくようなその視線は見えなかっただろう。いや、見えなくとも、感じていただろうか。

「目が見えないことで一番残念なのは、人々が美しいと言うおまえの面貌を見ることが出来ないことだ、司。今のおまえのその表情も、さぞ美しいことだろう」

と、唇の端を持ち上げる。多分、笑み、なのだろう。

「確かめて見ますか？」

司は言った。

「残念だが、私が触れるころには、もういつもの無表情な面貌に戻っているだろう。それに、今はおまえに触りたくないほど腹を立てている」

「……」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1928ba/>

イースター

2012年1月6日14時47分発行